

2022 年度 博士学位申請論文

『キルケゴールのキリスト論：ハイベアとマーテン
センのキリスト論との関係で』

立教大学大学院 キリスト教学研究科

鹿住輝之

目次

序論

- 第一節 本研究の方法論と目的
- 第二節 先行研究と本研究の独自性

第一章 三者の危機意識の基盤となったデンマークにおける国家とキリスト教の関係

- 第一節 デンマークにおける国家と宗教の結びつき
- 第二節 敬虔主義と啓蒙主義
- 第三節 自由主義の台頭
- 第四節 自由主義と農民覚醒運動とナショナリズムの結合
- 第五節 1848年の革命と信教の自由

第二章 ハイペアのキリスト論

- 第一節 ハイペアの生い立ちと問題意識
- 第二節 ハイペアの『現代にとっての哲学の意義について』：哲学と神学、芸術の関係
 - 第一項 ハイペアの危機と世界史
 - 第二項 哲学と宗教、芸術の関係性
 - 第三項 哲学と学的詩
- 第三節 「ローテ博士の三位一体論と和解論への批評」におけるハイペアのキリスト論
 - 第一項 ハイペアの無限理解：悪無限と真無限
 - 第二項 ハイペアの精神理解とキリスト理解

第三章 マーテンセンのキリスト論

- 第一節 マーテンセンの生い立ちと問題意識
- 第二節 マーテンセンの受肉理解
 - 第一項 『人間の自己意識の自律』における良心論
 - 第二項 マーテンセンの啓示解釈：創造、受肉と神の国の関係性
- 第三節 マーテンセンの危機意識と教会論
 - 第一項 マーテンセンの危機意識 国家と教会の分離について
 - 第二項 『キリスト教洗礼』における教会論と洗礼論

第四章 キルケゴールのキリスト論

第一節 『イロニーの概念』におけるキルケゴールの問題意識

- 第一項 当時のイロニー理解とキルケゴールの問題意識
- 第二項 イロニーの否定性と倦怠
- 第三項 キルケゴールの自由主義と新聞への批判
- 第四項 イロニーへの対処法
- 第五項 イロニー批判とハイペア、マーテンセンとの関係

第二節 『あれかこれか』における思弁批判

- 第一項 『あれかこれか』の成り立ちとその題名の由来
- 第二項 『あれかこれか』のAの美的立場とロマン主義者のイロニー
- 第三項 Aの立場と思弁的立場との相似性
- 第四項 選択することと絶望：Bによるイロニーの克服法

第三節 『哲学的断片』と『後書き』でのキリスト教の思弁的解釈への批判

- 第一項 ギリシア思想とキリスト教の立場の相違
- 第二項 実存と三つの領域
- 第三項 神の低さと苦しみ：生成する神

第四節 愛としてのキリスト論

- 第一項 『愛のわざ』における隣人愛
- 第二項 愛の赦し

結論

参考文献

博論要旨

これまでの研究の中で、ヘーゲル主義者とされるハイペアやマーテンセンは、キルケゴールによる批判の対象として描かれてきた。しかし近年の研究によると、彼ら三者は、当時デンマーク社会が直面した価値基準の崩壊に対し、同じような危機感を持ち、その原因となった自由主義運動に対する批判的な態度を共有していたという。ただしこうした研究に欠けているのが、三者のこの危機に対する解決策の中で鍵となるキリスト論への言及である。というのも、三者はキリストを解釈しなおすことで、瓦解しつつあったキリスト教国の価値観・世界観を再構築・刷新しようとしていたからである。

しかし危機に対して共通認識を持ちながら、三者はキリストに対し、異なった意味付けをする。ハイペアやマーテンセンは、ヘーゲル哲学に影響を受けつつ、キリストを理性の働きの体現者として解釈し、集団の規範的な役割を与える。マーテンセンはその理性の働きを神に帰すのだが、キリスト教を世界史の運動と結び付ける点で、ハイペアと一致する。それに対し、キルケゴールは、集団の規範から逸脱せざるを得ない人間、理性と感性の間で引き裂かれ、その間で存在することを余儀なくされたに人間に対する贖罪者として、キリストを描いている。本論文は、彼らの異なるキリスト論を見ることで、キリスト教的価値観の崩壊に対して生じた、異なった対処法について考察する。

第一章では、三者の危機意識の発生の経緯をたどるため、宗教改革から三月革命に至るまでのデンマークでの国家と教会の関係について論じた。デンマークでは1848年に立憲革命が起き、翌年自由主義憲法が制定される。それに伴い国家教会から国民教会へと制度が変化するが、それを支えたのが信教の自由を求めた合理主義神学や宗教覚醒運動、グルントヴィ派であった。30年代、40年代に主に著作活動を展開した三者はそれらに支えられた自由主義運動に危機感を持っていた

第二章の「ハイペアのキリスト論」では、彼の個人的な問題意識を論じることから始め、彼の危機意識とその解決策を論じた。ハイペアは青年期、多様な才能を持ち自身の道を決めかねており、その迷いをヘーゲル哲学と出会いによって解決した。ヘーゲルの無限理解は、有限と無限を対立させるのではなく、有限の中に無限の働きを見、有限なものの意味を捉え返す。その理解は、彼の時代への診断においても反映されていた。彼は同時代の自由主義運動の中に、有限と無限の対立を見た。宗教的な権威が失われ、人々は有限な欲求に基づき、政権への批判を行う。ハイペアは、もはや宗教が現状を秩序付ける価値を提供することができないことを認める。しかし既存の価値を支えてきた宗教を廃棄するのではなく、その中に働く無限の理念を見ることによって、再度新たな価値を構築しようとする。そのために用いられたのが、ヘーゲル哲学であり、ハイペアの詩であった。彼は、詩作を通し、世界史の理念の働きを意識化させ、価値の相対化を防ごうとした。彼のキリスト論は、そのような試みの中に位置づけられる。ハイペアは、キリストをヘーゲルの論理学に由来する、普遍、特殊、

個別の概念を用い、解釈した。人間の理性を普遍、身体を特殊としたうえで、ハイペアは、特殊な身体を持ちながら、それを超えた理性を意識化する在りかたを個別と呼ぶ。キリストは、普遍を特殊の中で真に体現した個別である。人は、普遍と特殊の完全な合致をキリストに見るとともに、彼を通し、自身の中の普遍を観想的にとらえることができる。このようにハイペアにとってキリストとは、普遍的な理性の体現者であると同時にその働きを他者に伝えた教師であった。

第三章の「マーテンセンのキリスト論」では、彼の個人的な問題意識から出発し、彼が問題視していた人間の自律とそれに対する解決策を見た。マーテンセンは、青年期に信仰と認識の関係性について考え、有神論と汎神論の間で揺らいだ。彼は汎神論的なヘーゲル哲学は説得力を持ったが、自身と関わらない神に疑問を感じ、認識の根源に神への信仰が存在すると悟った。彼はその後、良心を思想の中心に据える神律的な思想を展開した。

『人間の自己意識の自律』では同時代の思想に現れる人間中心的な自律の思想に対し、批判が向けられた。カントやシュライアマハーの神理解は、個人の理性や感情を基盤とした人間中心的な神理解である。マーテンセンは、ヘーゲル哲学から影響を受けつつ、世界史の働きを神に帰すことによって彼の思弁神学を構想した。それは、神との関係により生じる良心を中心に据えた思想であり、人間を介し神が、歴史の中で自己を顕わにする運動を説くものである。彼のキリスト論は、その良心の働きとの関連で展開された。神が良心を通し歴史において自己を表す運動は、啓示と呼ばれる。その運動は、創造、受肉、神の国から成る。創造は神が自己の他である自然となる運動を意味する。受肉は、神がキリストを通し、人間の内で働くことを明らかにする。キリストを通し、人は自身の内の神の働きを知り、その働きを体現しようと意識化する。神の国は、人々が、キリストが体現した理想を共有し、その理想に倣う社会であり、目指されるべき歴史の最終地点であった。このように彼が神律的な思想を展開した裏には、個人の理性や信仰を基盤とした運動によって、教会と国家の結びつきが弱まったことについての危機感があった。彼の教会論は、個人が信仰に至るための前提としての教会の重要性を論じたものであり、洗礼などの sacrament の重要性を説くことによって、伝統的な国家と教会の結合を維持しようとしたものだった。

第四章の「キルケゴールのキリスト論」では、『イロニーの概念』の分析を通し、彼の問題意識を見た。キルケゴールもまた自由主義運動に対し批判的な目を持っていたが、彼の問題意識は、自由主義そのものというよりも、その根底に存在するイロニー的な態度についてのものであった。ロマン主義者たちのイロニーは、現実を否定し、快楽や空想に逃避するものであった。その際、重要なのは、この否定によって自己を維持する構造である。キルケゴールは、このイロニーをロマン主義者だけでなく、政府批判を行った青年ドイツ派や当時のデンマークの自由主義者と結び付けた。キルケゴールは彼らの中に真剣な改革への意志ではなく、イロニーを見る。イロニーの否定性に対し、キルケゴールが解決策として提唱したのが、その否定性を自身に向け、理想に向けて自己を限定すること、統制することであった。

否定性を自己へ向けることについては、ハイペアやマーテンセンも述べており、その点でキルケゴールは、彼らとイロニーに対する批判、解決策を共有していた。

しかし『あれかこれか』においてキルケゴールは、ハイペアやマーテンセンの思弁的な傾向にイロニーと同様の現実を否定する傾向を見る。思弁は個人を世界史の契機として見る点で、個人の現実を否定する。したがってキルケゴールの批判は、ハイペアやマーテンセンのイロニーへの解決策自体が、イロニーと同じ性質を持つというものだった。

『哲学的断片』や『後書き』では、キルケゴールの批判は、キリスト教の思弁的解釈を行ったマーテンセンへ向けられていた。キルケゴールはマーテンセンのキリスト教理解を人間の身体性を軽視するギリシア思想と結び付け、神の受肉に基づくキリスト教の本来の立場からかけ離れていることを示した。受肉は、思考と関わる永遠の性質を持った神が身体を持つ限定づけられた存在として現れたことを意味し、キリストは思考によっても感性によっても捉えられない逆説とされた。この両義性は、思考と存在の間にある人間の実存に対応する。美的、倫理的、宗教的領域の記述を通し、キルケゴールは、彼が宗教性 B と呼ぶキリスト教立場のみが、思考と身体の双方と関わる人間に対し、真に目的を与えると主張した。キリストの姿は、思考と身体の間で苦しむ個別者として描かれ、その在りかたが人間の倣うべき理想とされた。

このキリストの姿を愛と呼び、より詳細に論じたのが『愛の業』であった。キリストは、社会関係から排除された罪人を愛したが、罪とは、思考と身体の間で苦しむ個別者を表すものであり、キリストが愛したのは概念的な把握を逃れるその他者性である。キリスト教徒の義務は、特定の価値づけから排除された個別性をキリストに倣い愛することであり、それを超えた連帯を求めることであった。

しかしこの理想は、非常に高いものであり、人はそれを達成することができない。その際に現れるのが贖罪者としてのキリストであった。キリストは自身の罪を告白した者の罪を見ず、その中に愛を見る。それはキリストに倣い他者の中の個別性を愛そうとする者が、その愛を完遂できず、罪を告白する時、その罪を愛し赦すものである。このようにキリストは、キリスト教徒に倣うべき理想を示すとともに、その挫折の中に完全性を見る赦しを与える弁証法的な役割を持っていた。